opusdei.org

## 黙想:復活の主日

黙想のテーマ:「聖なる婦人たちの人生を新たに照らすご復活」「墓へと走るペトロとヨハネ」「聖母とともに味わうご復活の喜び」

<u>聖なる婦人たちの人生を新たに照ら</u> すご復活

墓へと走るペトロとヨハネ

聖母とともに味わうご復活の喜び

エルサレムに日が昇ります。太陽は 城壁、神殿、要塞の塔を照らしはじ

め、暗闇は街から退きつつありま す。マグダラのマリアと婦人たちは 街の北西、カルワリオへと向かいま す。道にはまだ人がいません。婦人 たちにとって、イエスの死は、地が 永遠に暗闇に包まれたままになるこ とを意味していました。太陽は二度 と、イエスが彼女たちといたときの ように、地を照らすことはないと感 じていました。それでも、婦人たち は、明かりの不足、最高法院によっ て番兵が配置されたこと、キリスト が亡くなってすでに三日目であるこ とを問題としませんでした。墓を塞 いでいる石をどのようにして動かす のか、その術を持ち合わせていませ んでした。しかし婦人たちは家に 留っていようとはしませんでした。 墓へと向かう道において、以前イエ スが歩んだ場所を通り過ぎると、婦 人たちの心は押しつぶされそうにな ります。それでも、不安や恐れに屈 しません。

聖ホセマリアは言います。「私はこ の婦人たちの信仰に心を動かされま す。母のことが記憶によみがえりま す。皆さんも、あなたがたの素晴ら しいお母さんのことを思い出すこと でしょう (…)。あの婦人たちは、 番兵たちのことを、墓が完全に封印 されていることを知っていました。 しかしそれでも主の体に香油を塗る ためにお金を使います (…)。その ように行動をするのは勇気が必要で す(…)。墓に到着したとき、石が わきに動かされているのを目にしま した。このようなことは常に起こり ます。私たちが、しなければならな いことをすることを決断するとき、 困難は容易に解消されます I ™。

受難の恐ろしい苦しみさえも乗り越 える、このようなイエスへの強い愛 を持つことができるよう、あの婦人 たちに頼みましょう。彼女たちの心 から、キリストが燃え上がらせた炎 が完全に消えてしまうことはありま せんでした。朝早く起きたことは無 駄ではありませんでした。神はこの ような愛に打ち負かされ、婦人たち にあらゆる預言の成就となる最高の 知らせを伝えます。「主はわたした ち一人ひとりにいいます。『わたし は復活し、今やいつもあなたととも にいる』。わたしの手はあなたを支 える。あなたがどこに落ちようと も、あなたはわたしの手の中に落ち ることになる。わたしは死の門の前 にもいる。あなたとともに歩む人が 一人もいなくなっても、あなたが何 も携えられなくなっても、わたしは あなたを待ち受けている。そしてわ たしはあなたのために闇を光に変え 3 | 1210

婦人たちは、少し混乱しながらも大喜びで、使徒たちに見たことを伝えるために、高間へと走ります。息せ

き切って現れた婦人たちの言うこと は使徒たちには狂気に聞こえます。 彼女たちの言葉には、緊張、興奮、 喜び、涙が入り混じっています。ペ トロとヨハネは、聞いたことすべて を信じることができなかったかもし れません。それでも二人は、彼らの 師への思いから、高間を飛び出して 走っていきます。「二人は一緒に 走ったが、もう一人の弟子の方が、 ペトロより速く走って、先に墓に着 いた」(ヨハネ20・2)。私たちも彼 らと一緒に走りたいと思います。そ れどころかヨハネより早く走りたい と望みます。婦人たちが言ったこと がもし本当だとしたら?…イエスが 自身の約束を成就したのだとした ら?…道々を横切る間、太陽が昇っ ていきます。そして二人の使徒の心 にある希望は増していきます。

聖ペトロに少し目を向けてみましょう。「彼は他の人々のように、考えながら座り続けたり、家に留まった

りしたのではありません。当時の重 苦しい雰囲気に屈したのでも、自ら の疑惑に圧倒されたのでも、後悔の 念や恐れ、意味のないうわさ話にと りつかれたのでもありません。ペト 口は自分自身ではなく、イエスを探 し求めました。 (…)。ここには、 ペトロの復活、ペトロの心の復活の 始まりが示されています。ペトロ は、悲しみと暗闇に屈することな く、希望が入る余地をもうけまし た。彼は自分の心を封じずに、神の 光がそこに入るがままにまかせたの ですしい。

私たちもペトロのようにイエスを否 定したことがあったかもしれません。それなら私たちもペトロのいとに立ち返りたいます。聖ホセマリアは言いますると、自己を刷新ること、自己を引いますると、自己を引いると、でもの道に生じる障害(…)。あなたの道に生じる障害 物をイエス・キリストの足元に置き なさい。そのことによってキリスト が高く掲げられ、勝利をおさめるた めです。決して心配しないでくださ い。心を改め、再出発してくださ い。何度も何度もチャレンジしてく ださい。もしもあなたにそれができ ないのなら、最後には主が塀を飛び 越えることができるよう助けてくれ るでしょう。塀、すなわち聖性とい う塀です。これもまた自己刷新の一 つの形です。自己に打ち勝つ一つの 形です。毎日、復活するのです。こ のことが、私たちの道の目的地であ る愛に到着できるという保障となる ようにしる

イエスの母マリアはその朝、墓に行かず家に残りました。もしかしたら 心の中で微笑んでいたかもしれません。彼女を除いて誰も、父なる神の

ご計画を本当に受け入れることがで きた人はいませんでした。他の弟子 たちは、「イエスは必ず死者の中か ら復活されることになっているとい う聖書の言葉を、(…)まだ理解し ていなかった| (ヨハネ20・9) ので す。聖母はイエスの言葉を心に納め ることが習慣になっていました。あ の苦しみの金曜日以降、マリアはイ エスが言ったこと、行ったことに思 いを巡らせていました。そしておそ らく、聖母の心には、三日目に復活 するというあの不思議な言葉が響い ていたことでしょう。

聖金曜日とイエスのご復活は、二千年経った今も、私たちの人生に力と意味を与え続けています。ですから、「地上で起こるありとあらの事の重要性は相対的です。こし私たちが神化されているのなら、私たちちが神化されることはないでしまって、私たちの弱さと過ちによって、

ちっぽけな事柄に大きな重要性を与え、それゆえ苦しむならば、それは 私たちがそう望むからです。主と 致してるならば、私たちは安全で す。キリストの十字架と一致しているならば、ご復活の栄光と聖霊降臨 の炎に一致しているのならば、す てを乗り越えることができます」

聖ホセマリアは、聖母のそばにいることを意識することを好んでいました。それは特にご復活の喜びにおいて顕著でした。「ご復活の勝利における安全」[6]。アレルヤの祈り

(Regina Coeli)を唱えることにより、私たちは御母の笑顔を引き出すことができます。聖母は、ご復活によって刷新された、生まれたばかりのご自身の子どもたちを聖なる誇りをもって眺めることでしょう。イエスが私たちと永遠にいてくれることを味わいながら、聖母の喜びに与る

期待を持って、私たちは「聖マリア、お喜びください」と唱えます。

- [1] 聖ホセマリア、説教、1959年3月 29日。
- [2] ベネディクト十六世、復活徹夜 祭ミサ説教、2007年4月7日。
- [3] フランシスコ、説教、2016年3月 26日。
- [4] 聖ホセマリア、説教、1959年3月 29日。
- [5] 同。
- [6] 同。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-fukkatsu-no-shujitu/(2025/12/15)